現代ポーランド語における男性人間名詞の

複数主格形語尾について

東京外国語大学外国語学部

ロシア・東欧課程ポーランド語専攻 4 **年**

6807175 **貞包和寛**

【目次】

1. はじめに

現代ポーランド語のいわゆる男性人間名詞は、複数主格形において -i / -y / -e / -owie の四つの語尾からいずれかを選択する。これらの語尾の選択は、語幹末の音的あるいは形態的特徴によってある程度規則化できるが、一部の男性人間名詞に関しては選択に揺れが見られる場合がある。拙論の目的は、近年に出版された辞書とコーパスを用いて、これらの語尾選択に新しい傾向を見出せるか否かを検討することにある。

2. 男性人間名詞の複数主格形

まず、男性人間名詞複数主格形の一般的な形成方法について述べる。

単数主格形の語幹末が硬子音に終わるもの（硬語幹型）は、語幹末の硬子音が対応する軟子音と交替し、それに語尾 -i を付与することで得られる。例えば *prezes*「社長」> *prezesi*（s / ś の音交替＋語尾 -i [1]）。ただし、語幹末の硬子音が機能的軟子音[2]と交替するタイプの硬語幹型名詞は、語尾 -y を付与することで得られる。例えば *Japończyk* 「日本人」> *Japończycy* （k / c の音交替＋語尾 -y ）。ポーランド語の［i］と［y］は相補分布の関係にある。つまり、軟子音の直後では［i］が、硬子音の直後では［y］が現れる。よってこの二つは、同一音素の異音の関係にあるので、語尾 -i と 語尾 -y は機能的には同じものであると言ってよい。以下の拙論ではこの二つの語尾を -i で代表させる。

単数主格形の語幹末が軟子音または機能的軟子音に終わるもの（軟語幹型）は、語尾 -e を付与することで得られる（例：*pisarz*「作家」 > *pisarze* ）。

問題となるのは語尾 -owie である。この語尾は語幹末の音に関係なく結合し得る。しかしあらゆる男性人間名詞がこの語尾を取る訳ではなく、-owie の使用が規範的には認められていない語も多数ある（例：*Litwin*「リトアニア人」> *Litwini*, **Litwinowie* ）。逆に、もっぱら -owie のみを取る語もある（例：*filozof*「哲学者」 > *filozofowie*, **filozofi* ）。さらに、-owie / -i の両方を選択し得る硬語幹型名詞がある（例：*profesor*「教授」> *profesorowie* / *profesorzy* ）。同じく、-owie / -e の両方を選択し得る軟語幹型名詞もある（例：*burmistrz*「市長」> *burmistrzowie* / *burmistrze* ）。

従って現代ポーランド語の男性人間名詞の複数主格形の作り方は、以下の【表 1】のようにまとめることができるだろう。

---

[1] ポーランド語では、［i］の直前の軟子音は補助記号なしで書かれるので、*prezesi* に含まれる s は軟子音であると断定できる。

[2] 機能的軟子音とは、音的には硬子音でありながら、語形変化の際に硬子音の交替音として現れ得る音（すなわち、軟子音的に振舞う音）を言う。一般的には c, dz, sz rz / ż, cz, dż を指す。

【表 1】

硬語幹型名詞は以下の三つに分類できる。すなわち

① 語尾 -owie のみを取るもの。例：*filozof* > *filozofowie*

② 語尾 -owie / -i が並立するもの。例：*profesor* > *profesorowie* / *profesorzy*

③ 語尾 -i のみを取るもの。例：*Litwin* > *Litwini*

軟語幹型名詞は以下の三つに分類できる。すなわち

④ 語尾 -owie のみを取るもの。例：*król*「王」> *królowie*

⑤ 語尾 -owie / -e が並立するもの。例：*burmistrz* > *burmistrzowie* / *burmistrze*

⑥ 語尾 -e のみを取るもの。例：*lekarz*「医者」> *lekarze*

3. 先行研究のまとめ

「男性人間名詞の複数主格形の語尾選択」というテーマに関して、W.ドロシェフスキ（1960年代）、D.ブットレル（1970 年代）、J.ミョデク（1990 年代）が規範的な観点から言及している。記述的な観点からは、B.ドゥナイと石井哲士朗（共に 1990 年代）が論文をまとめている。以下にこの 5 人の研究を年代順に見ていこう。

3.1. W.ドロシェフスキの見解

ドロシェフスキはその著書 *O kulturę słowa*（『正しいことばのために』1964 年）の中で、規範的観点からこのテーマに関する意見を述べている。彼の意見では、男性人間名詞の複数主格形の語尾は、語末の音的・形態的特徴よりも、語の意味的な特徴（社会的地位・威厳）によって選択される。例えば、*profesor*「教授」と *aktor*「役者」は同じ -or という語末を持つが、前者は複数主格形で語尾 -owie を好み、後者は -i のみを取る。つまり、社会的地位や威厳を伴う（と見なされている）語彙は -owie を好むと主張している。ただし、*prezydent*「大統領」> *prezydenci, *prezydentowie* などの例外も見受けられる[3]。逆に、意味的には地位や威厳と関わりがないように見える男性人間名詞で、もっぱら -owie をとるものもある（例：*uczeń*「生徒」> *uczniowie, więzień*「囚人」> *więźniowie* ）。

もっとも、-owie が一部の男性人間名詞と結びつくのは現代ポーランド語に限った話である。古いポーランド語の文献[4]では、-owie があらゆる男性名詞と結びついていることが確認できる（例：*kraj*「国」> *krajowie* など[5]）。

[3] しかしながら、規範辞典の *prezydent* の項に „nie *prezydentowie*”「*prezydentowie* は誤り」と記されていることに注目したい。実際の使用では、**prezydentowie* という「誤った」形がしばしば見られるようである。

[4] ここでドロシェフスキが挙げているのは *„Psałterz floriański”*（『フロリアナ詩篇』14 世紀）

[5] あくまで私の仮説であるが、*uczeń* 「生徒」> *uczniowie, więzień*「囚人」> *więźniowie* などは、ここから説明できるかもしれない。つまり、これらの男性人間名詞が -owie を取るのは過去における形がそのまま残っているからなのである。

ドロシェフスキは結びとして、男性人間名詞複数主格形の形成方法を規則化することはできないだろうと述べている。

3.2. D.ブットレルらの見解

ブットレル、クルコフスカ、サトキェヴィチの三人も、その著書 *Kultura języka polskiego*（『ポーランド語の品格』1976 年）の中で、やはり規範的観点からこのテーマを論じている。著者らはまず、男性人間名詞全体で -owie の適用される範囲が拡張していると主張する。とりわけ、語幹末の硬子音が機能的軟子音と交代する硬語幹型名詞、具体的には -log や -r で終わる借用語（詳しく言えば、語末が -ar, -er, -or, -ator に終わる語）を挙げている（例：*biolog* 「生物学者」> *biologowie* / *biolodzy* ）。著者らの意見によれば、-log に終わる男性人間名詞の複数主格形は、第二次大戦直後までは -log > -lodzy のみが規範的であった。しかし最近は -log > -logowie の方が優勢であるという。このような -owie の拡張の原因をブットレルらは以下の 2 点に求めている。

1. 語尾 -owie は男性人間名詞とのみ結合し得るので、名詞の男性人間性を明確に表し得ること。
2. 語幹末の音交替を起こさないこと。

二つの語尾の現れる頻度が名詞によって異なる場合があるとも述べている。例えば *senator*「上院議員」の二つの複数主格形 *senatorowie* / *senatorzy* は同じ頻度で現れるが、*oficer*「将校」における *oficerowie* / *oficerzy* では前者の方がより頻繁に現れる。さらに、-owie と -i の間の文体的な差異（-owie はどちらかというと中立的、 -i は口語的）ついても言及しているが、この違いはそれほど大きなものではないと言う[6]。

最終的には、以下の 2 点を以て結論としている。

1. 軟語幹型名詞では語尾 -e が一般的で、語尾 -owie は語彙的に限定された名詞にのみ結合する（例：*mistrz*「達人」> *mistrzowie* ）。
2. 硬語幹型名詞では基本的に -owie を優勢な語尾とする。どちらの語尾が規範的とも言えない場合、少なくとも口語のレベルでは -owie と -i の双方を規範的とする。

3.3. B.ドゥナイの記述

ドゥナイは *Język Polski* 誌に „Formy mianownika liczby mnogiej rzeczowników rodzaju męskiego we współczesnej polszczyźnie literackiej”（「現代ポーランド文語における男性名詞複数主格の諸形」1992 年）と題した論文を寄せている。ドロシェフスキとブットレルは規範的な観点から意見を述べたのに対し、ドゥナイのこの論文は記述的な観点から記されたものである。

ドゥナイは主に「1. 語彙的意味（人間を示すか否か）」「2. 語幹末の音」「3. 複数主格形

---

[6] ここでブットレルが言う「中立」というのは、「-owie は文体的には「口語的」「文語的」といった特徴を取りたてて示さない」という意味であろう。

の形態」の 3 点に基づいて、全ての男性名詞を分類した。その結果、男性人間名詞は以下の五つのグループに分類される。

(1) 姓名
(2) 人間を表し、語末が -anin もしくは -an で終わるもの
(3) 人間を表し、語幹が硬子音で終わるもの（ただし(2)を除く）
(4) 人間を表し、語末が -#c あるいは -Cca で終わるもの[7]
(5) 人間を表し、語幹が軟子音か機能的軟子音で終わるもの（ただし(4)を除く）。

(1) に属する名詞は殆どが複数主格形で -owie を取る。王朝の名称には揺れが見られる。

例：*Adam*「アダム（名）」> *Adamowie*

Zając「ザヨンツ（姓）」> *Zającowie*

Jagiełło「ヤギェウォ（姓）」> *Jagiełłowie*

Walezjusze 「ヴァロア朝」

Tudorowie / *Tudorzy*「テューダー朝」

Jagiellonowie「ヤギェロン朝」

(2) に属する名詞は、複数主格形 で -anin > -anie あるいは -an > -anie の形を取る。ただし、後者の例は実質的に 4 例のみである。

例：*dominikanin* 「ドミニコ会員」> *dominikanie*

Rosjanin 「ロシア人」> *Rosjanie*

Cygan 「ジプシー」> *Cyganie*

Hiszpan 「スペイン人」> *Hiszpanie*

krajan 「同郷人」> *krajanie*

zakrystian 「聖具室係」> *zakrystianie*

(3) に属する名詞は、複数主格形で -owie か -i のいずれか、あるいは両方を取る。

例：*profesor*「教授」> *profeosorowie* / *profeosorzy*

biolog「生物学者」 > *biologowie* / *biolodzy*

例外：*brat* 「兄、弟」> *bracia*

(4) に属する名詞は、複数主格形でもっぱら -i を取る。ただし語幹末の c が機能的軟子音であるので、音声的には［y］で表れる。例外的に -owie のみを取る語が幾つかある。

例：*chłopiec*「少年」> *chłopcy*

morderca「人殺し」> *mordercy*

例外：*ojciec* 「父」> *ojcowie*

rajca「評議会議員」> *rajcowie*（まれに *rajcy* ）

なお、*szewc*「靴職人」> *szewcy* は -#c あるいは -Cca の構造を持たないが、このグ

[7] # は形態素の境界を示し、正書法では出没母音を伴った-ec で表される。C は任意の子音である。

ループに属する。

(5) に属する名詞は、複数主格形で -owie / -e のいずれか、あるいは両方をとる。

例：*badacz*「研究者」> *badacze*

mistrz「達人」> *mistrzowie* / *mistrze*

3.4. J.ミョデクの見解

ミョデクはその著書 *Odpowiednie dać rzeczy słowo*（『適切な物の言い方』1993 年）で、*inżynier*「技師」と *pedagog*「教師」の 2 語を例に挙げてこの問題を論じている。ミョデクは、*inżynier* も *pedagog* も、複数主格形で -owie / -i の語尾選択があり得るが、それぞれ *inżynierowie* と *pedagodzy* の方がより理想的な形態としている。これらの語がもう一つの形態、つまり *inżynierzy* と *pedagogowie* という形態を取った場合、前者は ż と rz という同じ音が近くに生じ、後者は gogo という同じ音結合が隣接してしまうため響きがあまり良くない、と述べている。

3.5. 石井の記述

石井は、「ポーランド語名詞における格形態の文体的変異体について」（1993 年）と題した論文でこのテーマを扱っている。同じ格が複数の形態を持つ時、汎用性の高い形態（基本的変異体）に対して、基本的な意味は変わらないが何らかの特別なニュアンスを伴って現れる形態がある。石井はこれを「文体的変異体」と呼んでいる[8]。

石井によれば、語尾 -owie は厳粛さや優雅さを感じられるのに対し、語尾 -i は俗語的ニュアンスを持っている。石井は、男性人間性を一義的に示す複数主格形語尾 -owie を基本的変異体とし、-owie と並立して現れる他の語尾を「文体的変異体」としている。

4. 男性人間名詞複数主格形の語尾選択に関わる諸要因

前章では五つの先行研究を概観した。この章では、これらの先行研究のアプローチの方法を参考にして、男性人間名詞の複数主格形語尾の選択に関わる諸要因を整理したい。

4.1. 音論的要因

語末（語幹末）の音によって複数主格形の語尾が決定できる名詞がある。例えば、-f の語末を持つ男性人間名詞は、複数主格形で必ず -owie 語尾を取る（例：*filozof*「哲学者」> *filozofowie*, *kalif*「カリフ」> *kalifowie* ）。また、-t の語末を持つ男性人間名詞は、複数主格形で -i を取りやすい（例：*adwokat*「弁護士」> *adwokaci* ）。

---

[8] 石井はここで例として、基本的変異体 *doktor*「博士」と、その単数主格形における文体的変異体 *doktór* を挙げている。一般的に後者は、「口語体特有のやや精確さを欠く形態」としている。

4.2. 形態論的（造語論的）要因

語末の形態、つまり接尾辞によって、複数主格形の語尾が決定できる名詞がある。例えば、行為者を示す接尾辞 -ciel を持つ男性人間名詞は、複数主格形で必ず語尾 -e を取る（例：*nauczyciel*「教師」> *nauczyciele* ）。

4.3. 意味論的要因

社会的地位あるいは威厳を示すような意味を持つ男性人間名詞は、複数主格形で語尾 -owie を好む傾向がある（例：*oficer*「将校」> *oficerowie* / *oficerzy*, *profesor*「教授」> *profesorowie* / *profesorzy*）。

また、親族の名称は原則として -owie 語尾を取る（例：*ojciec*「父」> *ojcowie*, *syn*「息子」> *synowie* ）。ただし、親族の名称でも *dziadek*「祖父」 *wnuk*「孫」など、準男性人間名詞的語尾 -i を取り得るものがある。なお、「準男性人間名詞」に関しては「10. 〔補章〕準男性人間名詞について」で詳述する。

4.4. 文体論的要因

当該の発話やテクストのスタイルが男性人間名詞の複数主格形の語尾選択に影響を与えることがある。例えば、-owie / -i が並立する男性人間名詞に関して、一般的には「-owie は文体的に優雅で、厳粛さを伴う。一方 -i は俗語的（口語的）である」と言われることが多い。

5. 男性人間名詞複数主格形の語尾選択に伴う複雑さ

「1. はじめに」の章でも記したように、男性人間名詞複数主格形の語尾選択に関しては、意見の一致を見ないことがままある。その原因として、以下のようなものが考えられる。

5.1. 複数の要因が矛盾している場合

一つの要因に拠って複数主格形を得ても、他の要因と矛盾する場合が頻繁にある。ドロシェフスキも言及していた *prezydent*「大統領」を例として見てみよう。「4.1. 音論的要因」で挙げた「-t の語末を持つ男性人間名詞は、複数主格形で -i を取りやすい」という傾向に従えば、 *prezydent* > *prezydenci* という複数主格形は傾向通りのように見える。しかし、「社会的地位、威厳と関わりがあるような男性人間名詞は、語尾 -owie 語尾を好む」という意味論的要因とは明らかに矛盾する。

5.2. 大多数の傾向と異なる場合

「4.2. 形態論的（造語論的）要因」で、接尾辞から複数主格形を導き出せる名詞がある

ことは述べた。-ciel と同じく、行為者を示す接尾辞 -er で終わる男性人間名詞は、ドゥナイの指摘によれば、複数主格形で語尾 -i を取るものが殆どである。しかしその中で、-owie / -i の選択が可能な語が 6 語挙げられている（例：*inżynier*「技師」> *inżynierowie* / *inżynierzy* ）。

以上のような原因から、「男性人間名詞複数主格形の語尾選択」というテーマに関して容易に結論は下せない。拙論では今後、「3. 先行研究のまとめ」で概観した研究成果を踏まえつつ、先行研究より後に編纂された三冊の辞典とコーパスを用いてこの問題を検討していく。

6. 検討する語彙の選択

「3.3. B.ドゥナイの記述」で私が特に注目したのは、硬語幹型の男性人間名詞で語末が -r もしくは -g に終わるものと、軟語幹型の男性人間名詞で語末が -mistrz に終わるものである。これらの男性人間名詞は、複数主格形で二つの語尾（ -owie / -i あるいは -owie / -e ）を選択できるものがとりわけ多い。つまり、【表 1】の②と⑤に属するものが多い。従ってこれらの語彙は、「男性人間名詞の複数主格形の語尾選択」という拙論のテーマを検証するには最も適した語彙であると言えよう。

そこで筆者はまず、逆引き目録 *Indeks a tergo do Słownika języka polskiego pod redakcją Witolda Doroszewskiego* (red. R. Grzegorczykowa, red. J. Puzynina), Państwowe Wydawnictwo Naukowe, Warszawa, 1973（『W. ドロシェフスキ編集ポーランド語辞典対応逆引き目録』）を用いて三つのグループを作った。つまり、「語末が -r の男性人間名詞」「語末が -g の男性人間名詞」「語末が -mistrz の男性人間名詞」の 3 グループである。さらに、借用語に特有の接尾辞 -log, -er, -or で終わる男性人間名詞はそれぞれ独立のグループとしたので最終的に以下の六つのグループが形成された。

【表 2】

【G】: 語末が -g の男性人間名詞（ただし、-log で終わるものは除く）
【LOG】: 語末が -log の男性人間名詞
【R】: 語末が -r の男性人間名詞（ただし、-er, -or で終わるものは除く）
【ER】: 語末が -er の男性人間名詞
【OR】: 語末が -or の男性人間名詞
【MISTRZ】: 語末が -mistrz の男性人間名詞

【ER】【OR】に属する男性人間名詞の中には、語基と接尾辞が融合していて、その境界が

明確でない語もあるにはあるが、拙論ではこの件には触れず、語末の構成によってのみ分類した。

次に、比較的近年に出版された三つの辞典でこれらのグループに属する語を一つずつ当たり、全ての辞書に収録さている語のみを拾い出した。同時に、それらの語の複数主格形がどのように記述されているかも記録した。参照した辞書は以下の通り。

Uniwersalny słownik języka polskiego PWN (red. S. Dubisz), Wydawnictwo Naukowe PWN, Warszawa, 2006（『ポーランド語普遍辞典』以下 USJP と略）

Inny słownik języka polskiego PWN (red. M. Bańko), Wydawnictwo Naukowe PWN, Warszawa, 2000（『ポーランド語異質辞典』以下 ISJP と略）

Nowy słownik poprawnej polszczyzny PWN (red. A. Markowski), Wydawnictwo Naukowe PWN, Warszawa, 1999（『ポーランド語規範新辞典』以下 NSPP と略）

ちなみに、USJP と ISJP は詳解辞典（いわゆるポポ辞典）で、NSPP は規範辞典である。以上の作業の結果、拙論で検討を要する語は 243 語に絞られた。内訳は以下の通りである。

【G】:

Belg「ベルギー人」
bóg「（多神教の）神」
chirurg「外科医」
demagog「扇動政治家」
jog「ヨガの体得者」
mag「魔術師」
Norweg「ノルウェー人」
pedagog「教師」
szpieg「スパイ」
wróg「敵」　以上 10 語。

【LOG】:

anestezjolog「麻酔科医」
archeolog「考古学者」
astrolog「占星術師」
biolog「生物学者」
cytolog「細胞生物学者」
dermatolog「皮膚科医」
diabetolog「糖尿病専門医」

egiptolog「エジプト学者」
ekolog「生態学者」
embriolog「発生学者」　など計 43 語

【R】:
bojar「領主」
car「ツァーリ」
centaur「ケンタウロス」
emir「アラブ国家の首長」
fakir「(イスラム) 物乞い修道士」
komtur「騎士団の幹部」
łotr「恥知らず」
Mazur「マズール人」
par「英国貴族院議員」
praszczur「先祖」　など計 20 語

【ER】:
ankieter「アンケート調査者」
antybohater「反英雄」
aranżer「編曲者」
arbiter「専門家」
autsajder (*outsider*)「部外者」
belfer「(皮肉的なニュアンスで) 教師」
blagier「ほら吹き」
bohater「英雄」
bonifrater「ヨハネ騎士団員」
bookmacher (*bukmacher*)「馬券屋」　など計 68 語

【OR】:
adaptator「適用者」
administrator「管理者」
adorator「女性の機嫌取り」
agitator「アジテーター」
agresor「攻撃的な人」
aktor「役者」
akwizytor「営業係」

amator「アマチュア」
ambasador「大使」
animator「アニメーター」など計 87 語

【MISTRZ】:
arcymistrz「大家」
baletmistrz「バレエ団長」
burmistrz「市長」
fechmistrz (fechtmistrz)「フェンシングのコーチ」
harcmistrz「ボーイスカウトのコーチ」
kapelmistrz「指揮者」
kuchmistrz「料理長」
kwatermistrz「兵站将校」
mistrz「達人」
ochmistrz「船舶管理将校」　など計 15 語

7. コーパス *Korpus Języka Polskiego Wydawnictwa Naukowego PWN* について

「6. 検討する語彙の選択」によって抽出された語彙を一語ずつコーパスで検証し、それらの複数主格形の揺れを観察した。その詳細に関しては次章「8. 辞書記述の比較とコーパスによる検証結果の考察」について述べる。この章では、今回使用した *Korpus Języka Polskiego Wydawnictwa Naukowego PWN* について解説したいと思う。

このコーパスは、学術関連の書籍を中心に扱っているポーランドの大手出版社 Wydawnictwo Naukowe PWN がインターネット上で無料公開しているものである。USJP をはじめ、近年出版された辞書はこのコーパスに依拠したものが多い。「体験版 wersja demonstracyjna」と「完全版 pełny korpus」の二つのバージョンがあるが、拙論では「体験版」を使用した。「体験版」のコーパスは以下のように構成されている。

ジャンル	*比率（%）*	*総数*
文学作品	14	75
文学作品以外	28	115
報道	39	154
会話	10	69
チラシ、ポスター、取扱説明書など	9	85

「文学作品以外」と「報道」の内訳	*比率(%)*
哲学・宗教	7
歴史・地理（回想録含む）	12
文学評論・言語学（エッセイ含む）	8
数学・自然科学	9
政治・経済	11
社会科学	8
応用科学	11
芸術	9
レクリエーション・その他	19
日刊紙	6

年代	*比率(%)*
1920-1945	3
1946-1969	12
1970-1989	23
1999-2000	62

8. 辞書記述の比較とコーパスによる検証結果の考察

この章では、辞書記述の比較検討とコーパスによる検証の結果を考察する。まず、全体的に指摘できる点から見ていこう。

三つの辞書記述を比較検討すると、使用した辞書の間でも記述に揺れのあることが分かる。*ginekolog*「婦人科医」を例に見てみよう。*ginekolog* の複数主格形には *ginekologowie / ginekolodzy* の二つが考えられる。USJP ではどちらの形も認めているのに対し、ISJP と NSPP は前者しか認めていない。これは、ポーランド語研究者の間でもこのテーマに関する意見が分かれていることを証明しているように思われる。

コーパスによる検証で注意を引くのは、二つの複数主格形語尾のコーパス上における出現頻度に著しい差があるものが見受けられることだ。例えば *archeolog*「考古学者」は、前述の三つの辞典いずれも、複数主格形 *archeologowie / archeolodzy* の二つを認めている。ところがコーパスによる調査の結果、斜格を含めた *archeolog* 全ての検索結果は 100 件のうち、*archeologowie* は 1 例のみで、*archeolodzy* は 46 例も見出された。ちなみに、前出の *ginekolog* は検索結果 35 件のうち、複数主格形は 2 例見出され、内訳は *ginekologowie* が 0、*ginekolodzy* が 2 例であった。

以下、【表 2】のグループごとに見ていく。なお、辞書記述の比較とコーパスによる検証

結果については表にして示すこととするが、その表示方法について *bohater*「英雄」を例に説明する。

例：

男性人間名詞 *bohater* の複数主格形を上記三つの辞書で調べた結果、いずれの記述も二つの語尾、すなわち *bohaterowie* / *bohaterzy* の並立を認めていた。

次に、コーパスで男性人間名詞 *bohater* を検討した結果、この語は斜格を含めてコーパスに 372 件収録されていた。そのうち複数主格形 *bohaterowie* は 42 例、 *bohaterzy* は 5 例、準男性人間名詞的形態は 0 であった。すなわち、*boahter* の複数主格形のうち、語尾 -owie を持つ形態は 89%、語尾 -i を持つ形態は 11% 、準男性人間名詞的形態は 0% の率であらわれる。

以上のような辞書記述とコーパスの検討結果を、下のような表で一括して示す。

語	USJP	ISJP	NSPP	コーパス			
				合計	男人・複主		準男人・複主
					-owie	-i	
bohater「英雄」	-owie / -rzy	-owie / -rzy （稀）	-owie / -rzy	372	42 (89%)	5 (11%)	0

なお、語尾選択に揺れが見られない場合、つまりいずれかの語尾が 100% である場合、パーセンテージは表示しないこととする。

8.1.【G】について

【G】に属する語は、上に挙げたように僅か 10 語なので、それらの辞書記述とコーパスによる検証の結果をここで全て示す。

語	USJP	ISJP	NSPP	コーパス			
				合計	男人・複主		準男人・複主
					-owie	-i	
Belg「ベルギー人」	-owie	-owie	-owie	61	17	0	0
bóg「（多神教の）神」	ci bogowie / te bogi	-owie	ci bogowie / te bogi（古風）	1911	24	0	1

chirurg 「外科医」	-rdzy / -owie	-rdzy	-rdzy	59	0	7	0
demagog 「扇動政治家」	-odzy / -owie（稀）	-odzy	-odzy / -owie（稀）	12	0	3	0
jog 「ヨガの 体得者」	-owie	-owie	-owie	0	0	0	0
mag 「魔術師」	-owie	-owie	-owie （-dzy は誤）	24	4	0	0
Norweg 「ノルウェー人」	-owie/ -edzy	-owie / -edzy（稀）	-owie / -edzy	72	32	0	0
pedagog 「教師」	-owie / -odzy	-odzy / -owie	-dzy / -owie（稀）	111	0	16	0
szpieg 「スパイ」	-edzy	-edzy	-edzy（-owie と -i は誤）[9]	86	0	4	0
wróg 「敵」	wrogowie	-ogowie	wrogowie	441	34	0	0

上の表を基にすれば、【G】に属する 10 語の複数主格形は以下のように分けられる。

1. -owie / -i の揺れが、少なくとも一つの辞書に記述されているもの：*chirurg, demagog, Norweg, pegagog*

2. -owie のみが辞書で認められているもの：*Belg, jog, mag, wróg*

3. -i のみが辞書で認められているもの：*szpieg*

4. -owie / 準男性人間的形態の揺れが少なくとも一つの辞書で記述されているもの：*bóg*

【G】では、どの男性人間名詞がどちらの語尾を好むか、かなりはっきりとコーパスに現れているように見える。ここで筆者は、-owie が語幹末の音交替を伴わないという点に注目した。【G】の中で -owie のみが認められている 4 語および -owie の頻度の高い *bóg* はいずれも一音節語である。仮にこれらの語が複数主格形で -i を取って g / dz の音交替が生じた場合、多音節語に比べて他の形態との相関が連想し難い。例えば *jog* の複数主格が **jodzy* であった場合、この形態が *jog*（単数主格）や *jogów*（複数主格）と共にパラダイムを成すことは、一目では分かりにくいだろう。逆に複数主格形が *jogowie* であれば、語幹がその他の形態と一致していて、同一のパラダイムを成すことは一目瞭然である[10]。ただし、この説

[9] 「-i は誤」は、ここでは「音交替を伴わない（準男性人間名詞的）-i は誤 」の意味。

[10] 一音節語ではないが、*Norweg* が -owie を好む理由も同じように説明できるかもしれない。複数主格形で音交替した形態 *Norwedzy* の場合、国名 *Norwegia* との連想が難しくなってしまうように思われる。

明では *szpieg* は例外扱いとなってしまう。

もう一つ注目すべきは、-gog で終わっている 2 語、つまり *demagog* と *pedagog* である。両者とも、辞書記述に拠れば -owie / -i の並立が認められるが、コーパスではどちらも -i のみを取っている。これは、「3.4. J.ミョデクの見解」を裏付けている。

8.2.【LOG】について

【LOG】に属する男性人間名詞の辞書記述を比較してみよう。【LOG】に属する 43 語のうち、USJP は *teatrolog* 「演劇研究者」を除く全ての語で -owie / -i の並立を認めている[11]。ISJP は -owie / -i の並立を 20 語認め、NSPP は -owie / -i の並立を 14 語認めている。

これら 43 語のうち、コーパスによる検証で複数主格形が見出されたのは 27 語であった。この 27 語のうち大部分は、どちらの語尾を好むかがコーパス上にかなりはっきり表れている。以下に、一方の語尾の現れる確率が他方を 90% よりも上回っている 20 語を示す。

語	USJP	ISJP	NSPP	コーパス			
				合計	男人・複主		準男人・複主
					-owie	-i	
anestezjolog 「麻酔科医」	-odzy / -owie	-odzy	-odzy	40	0	10	0
archeology 「考古学者」	-odzy / -owie	-odzy / -owie（稀）	-odzy / -owie	100	1 (2%)	46 (98%)	0
astrolog 「占星術師」	-odzy / -owie	-owie	-odzy / -owie	13	3	0	0
dermatolog 「皮膚科医」	-owie / -odzy	-odzy	-odzy	10	0	1	0
diabetolog 「糖尿病専門医」	-odzy / -owie	-odzy	-odzy	2	0	1	0
ekolog 「生態学者」	-odzy / -owie	-odzy / -owie（稀）	-odzy / -owie（稀）	12	0	4	0
farmakolog 「薬物学者」	-odzy / -owie	-odzy	-odzy	1	0	1	0
filolog 「文献学者」	-owie / -odzy	-owie / -odzy	-odzy / -owie（稀）	13	0	3	0
ginekolog 「婦人科医」	-owie / -odzy	-odzy	-odzy	35	0	2	0

[11] ちなみに、*teatrolog* に関しては三つの辞書全てが、複数主格形で *teatrolodzy* と記述している。

kardiolog 「心臓病学者」	-odzy / -owie	-odzy	-odzy	28	0	10	0
kryminolog 「犯罪学者」	-odzy / -owie（稀）	-odzy	-odzy	4	0	1	0
laryngolog 「咽喉科医」	-owie / -odzy	-odzy	-odzy	9	0	2	0
metodolog 「方法論者」	-odzy / -owie	-owie / -odzy	-odzy / -owie（稀）	2	1	0	0
neurolog 「神経学者」	-odzy / -owie（稀）	-odzy / -owie（稀）	-odzy	19	0	5	0
onkolog 「腫瘍学者」	-owie / -odzy	-odzy	-odzy	7	0	2	0
ornitolog 「鳥類学者」	-owie / -odzy	-odzy	-odzy	7	0	2	0
rentgenolog 「放射線学者」	-odzy / -owie	-odzy	-odzy	1	0	1	0
seksuolog 「性科学者」	-owie / -odzy	-odzy / -owie	-odzy	11	0	4	0
technolog 「技術者」	-odzy	-odzy / -owie（稀）	-odzy	19	0	4	0
zoolog 「動物学者」	-odzy / -owie（稀）	-owie / -odzy（稀）	-odzy / -owie（稀）	17	2	0	0

この表に関して言えば、辞書記述とコーパスによる検証の結果に矛盾があまり見られない。*farmakolog* のように、頻度自体がかなり少ないと思われる語もあるが、全体的には -i を好む語が多いという傾向を指摘できるだろう。*archeolog* はコーパス上で 100 件も収録されており、そのうち複数主格形 47 例のうち 46 例が -i を取っているので、この語に関しては -i を唯一の語尾と見なしてもそれ程問題はないように思う。

次に、二つの語尾の出現がある程度競合している 7 語を示す。

語	USJP	ISJP	NSPP	コーパス			
				合計	男人・複主		準男人・複主
					-owie	-i	
biolog 「生物学者」	-owie / -odzy	-odzy / -owie	-odzy / -owie	55	5 (25%)	15 (75%)	0

geolog 「地質学者」	-owie / -odzy	-odzy / -owie	-odzy / -owie（稀）	22	2 (40%)	3 (60%)	0
ideolog 「イデオロギー信奉者」	-owie / -odzy	-odzy	-odzy / -owie	47	3 (43%)	4 (57%)	0
meteorolog 「気象学者」	-odzy / -owie	-odzy / -owie	-odzy	14	1 (14%)	6 (86%)	0
psycholog 「心理学者」	-odzy / -owie	-owie / -odzy（稀）	-odzy / -owie	190	15 (54%)	13 (46%)	0
socjolog 「社会学者」	-owie / -odzy	-owie / -odzy（稀）	-odzy / -owie	117	19 (76%)	6 (24%)	0
teolog 「神学者」	-owie / -odzy	-owie / -odzy（稀）	-owie / -odzy	64	6 (67%)	3 (33%)	0

こちらの表で扱っている語は、前の表と比較してコーパス上での出現頻度が比較的高い（この表に収録されている 7 語は平均で 72,7 件収録されているのに対し、前の表に収録されている 20 語は平均で 17,5 件しか収録されていない）。

コーパス上での頻度が高く、かつ複数主格形で語尾の競合が見られる場合、少数の語尾を一概に例外とは見なしにくい。【LOG】に属する男性人間名詞で頻度の高い語に関しては、表現に幅を持たせるために、同じ機能を持つ二つの語尾があえて競合しているのではないかと考える。

8.3.【R】について

辞書記述によれば、【R】に属する男性人間名詞は -i を好むもの、あるいはもっぱら -i のみをとるものが多く、コーパスもそれを実証している。例えば *Tatar*「タタール人」は三つの辞書全てが -i のみを認めていて、コーパス上では全 57 件のうち -owie は 0、-i は 16 例、準男性人間名詞的形態は 0 であった。【R】に属する男性人間名詞で -i よりも -owie を好む語は見当たらない。【R】に属する男性人間名詞で、コーパス上に複数主格形が現れた 8 語を以下に示す。

語	USJP	ISJP	NSPP	コーパス			
				合計	男人・複主		準男人・複主
					-owie	-i	
łotr 「恥知らず」	te -y / ci –rzy	-ry / -rzy	te -y / ci -rzy（稀）	15	0	0	1

Mazur 「マズール人」	-rzy / -y	-rzy	-rzy / te -y（口語）	1	0	1	0
prowodyr 「首謀者」	-rzy	-rzy	-rzy	10	0	1	0
sztygar 「炭鉱の監督技師」	-rzy	-rzy	-rzy	14	0	2	0
Szwajcar 「スイス人」	-owie / -rzy	-rzy	-rzy	81	0	35	0
Tatar 「タタール人」	-rzy	-rzy	-rzy	57	0	16	0
wampir 「吸血鬼」	-y	-y	-y	29	0	0	7
zbir 「人殺し」	-y	-y	-y	9	0	0	1

【R】に属する男性人間名詞で、次の 5 語は注目に値する。*car*「ツァーリ」、*emir*「アラブ国家の首長」、*komtur*「騎士団の幹部」、*par*「英国の貴族院議員」、*wezyr*「イスラム国家の政府高官」。これらの名詞の複数主格形はコーパスでは確認できなかったが、三つの辞書記述ではいずれも複数主格形で -owie のみを認めている。これらはいずれも音訳借用された語で、ポーランド語の語彙体系において借用語であると直ちに見なされることが予測される。ここから「借用性が比較的強く意識されるような男性人間名詞は、複数主格形で -owie を取る」という傾向を指摘できるかもしれない。この原因は、「8.1.【G】について」でも述べたが、-owie が語末の音交替を伴わないという点に求められるだろう。つまり、語末の r / rz という音交替を防ぐことで、パラダイムの他の形態との相関をより明確にできるのである。

8.4.【ER】について

【ER】に属する男性人間名詞は、複数主格形でもっぱら -i を取るものが多いということは「5.2. 大多数の傾向と異なる場合」で既に述べた。この傾向は三つの辞書記述からも裏付けられている。しかし、少なくとも一つの辞書で語尾の揺れが記述されている語が 17 語あり、そのうちコーパス上で複数主格形が収録されている語が 10 語見つかった。該当する語を以下に示す。

語	USJP	ISJP	NSPP	コーパス			
				合計	男人・複主		準男人・複主
					-owie	-i	
bohater 「英雄」	-owie / -rzy	-owie / -rzy（稀）	-owie / -rzy	372	42 (89%)	5 (11%)	0
ceper 「シーズンのみ山に来る人」	te cepry / ci ceprzy	-y	te cepry	6	0	0	1
inżynier 「技師」	-owie	-owie	-owie / -rzy（稀）	222	19	0	0
kiper 「ワインセラー管理人」	-rzy / kiprowie, -owie（稀）	-rzy	-rzy / -owie,-prowie （稀）	5	0	1	0
majster 「親方」	-trowie / -trzy（稀）	-trowie / -trzy（稀）	-trowie / -trzy（稀）	35	2 (67%)	1 (33%)	0
maruder 「略奪兵」	ci -rzy / te -ry	-rzy	ci -rzy / te -y（感情的）	4	0	1	0
oficer 「将校」	-owie / -rzy（稀）	-owie	-owie / -rzy（古風）	740	110	0	0
podoficer 「下士官」	-owie	-owie	-owie / -rzy（稀）	112	17	0	0
reżyser 「監督」	-rzy -owie（稀）	-rzy	-rzy / -owie	532	0	35	0
szwoleżer 「軽装騎兵」	-owie -rzy（稀）	-owie	-owie / -rzy（稀）	54	9	0	0

コーパスにおける収録数が比較的多く、かつ一方の語尾がかなり優勢なものが見られる。-owie を好む 4 語（*bohater, inżynier, oficer, podoficer*）に関して言えば、*bohater, oficer* の 2 語が -owie を好むのは、「4.3. 意味論的要因」によって説明できるように思われる。*podoficer* は「意味論的要因」に適う語とは見なしにくいが、*oficer* と関連のあることは明白であるので、*oficer* と同じく -owie を好んでいるものと考えられる。また *inżynier* が複数主格形で -owie を好むという事実も、「3.4. J.ミョデクの見解」を裏付けている。

問題となるのは *reżyser* である。この語の複数主格形は -i がほぼ支配的なように見える。前述したように、【ER】に属する男性人間名詞の大部分は複数主格形で -i を取るので、*reżyser* も大部分の傾向に従っているとも考えられる。しかし同じような構成を持つ

inżynier とは逆の傾向が見られ、かつ上で述べたミョデクの説明と矛盾している。

8.5.【OR】について

【ER】と同じく、【OR】に属する男性人間名詞も複数主格形で -i を取るものが殆どである。少なくとも一つの辞書で -owie / -i の揺れが確認され、コーパス上で複数主格形が収録されている 23 語を以下に示す。

語	USJP	ISJP	NSPP	コーパス			
				合計	男人・複主		準男人・複主
					-owie	-i	
ambasador 「大使」	-rzy / -owie	-rzy	-rzy / -owie	308	0	6	0
cenzor[12] 「1. 検閲官」 「2. 財務官」	-rzy / -owie(稀)	-rzy	1. -rzy 2. -owie	8	0	2	0
doktor 「博士」	-rzy / -owie	-rzy/ -owie	-rzy / -owie	498	0	5	0
dyktator 「独裁者」	-rzy / -owie(稀)	-rzy	-rzy	17	0	1	0
dyrektor 「責任者」	-rzy / -owie	-rzy	-rzy / -owie(稀)	2054	0	63	0
gladiator 「剣闘士」	-rzy / -owie(稀)	-rzy	-rzy / -owie(稀)	11	0	1	0
gubernator 「（米国の） 州知事」	-rzy / -owie(稀)	-rzy	-rzy / -owie	43	0	1	0
inicjator 「提案者」	-rzy / -owie(稀)	-rzy	-rzy	82	0	8	0
inkwizytor 「異端審問官」	-rzy / -owie(稀)	-rzy	-rzy / -owie(稀)	6	0	2	0
kantor 「先唱者」	-owie / -rzy	-rzy / -owie(稀)	-owie / -rzy	143	0	1	0
kurator 「教育委員長」	-rzy / -owie(稀)	-rzy	-rzy	123	0	9	0

[12] *cenzor* には二つの意味がある（「1. 検閲官」「2. 古代ローマの財務官」）。NSPP では、意味によって語尾選択に差異があることが記述されている。

major 「少佐」	-owie / -rzy	-owie / -rzy	-rzy / -owie	121	0	1	0
mediator 「休戦調停者」	-rzy / -owie（稀）	-rzy	-rzy / -owie（稀）	37	0	3	0
negocjator 「交渉人」	-rzy / -owie	-rzy	-rzy / -owie（稀）	154	0	64	0
obserwator 「観察者」	-rzy / -owie	-rzy	-rzy	240	0	51	0
organizator 「まとめ役」	-rzy / -owie（稀）	-rzy	-rzy	556	0	228	0
profesor 「教授」	-owie / -rzy（稀）	-owie / -rzy（稀）	-owie / -rzy（稀）	1225	47 (96%)	2 (4%)	0
prokurator 「検事」	-rzy	-rzy	-rzy / -owie（稀）	953	0	61	0
przeor 「男子修道院の修道院長代理」	-rzy / -owie	-rzy / -owie	-rzy / -owie	6	0	1	0
reformator 「改革者」	-rzy / -owie（稀）	-rzy	-rzy	45	0	11	0
rektor 「学長」	-rzy / -owie（稀）	-rzy	-rzy / -owie（稀）	210	0	12	0
senator 「上院議員」	-owie / -rzy	-owie / -rzy（稀）	-rzy / -owie	323	58 (94%)	4 (6%)	0
senior 「最年長者」	-rzy / -owie（稀）	-rzy	-rzy / -owie	69	0	5	0

この節の冒頭で述べたように、「【OR】に属する男性人間名詞は複数主格で -i を取る」という傾向がある。この表の中でその傾向に従っていないのは *profesor* と *senator* で、これは先述した「意味論的要因」によって説明できそうである。しかしこの要因だけでは *ambasador, dyrektor, rektor* など、「社会的地位・威厳」を伴っているような男性人間名詞が -i を好むという事実を説明できない。従ってここでは、*profesor* と *senator* は【OR】の中で例外的な語であると見なした方が良いだろう。

8.6.【MISTRZ】について

【MISTRZ】に属する語はそれ程多くない（15 語）ので、全てを以下に提示する。

語	USJP	ISJP	NSPP	コーパス			
				合計	男人・複主		準男人・複主
					-owie	-e	
arcymistrz 「権威」	-owie / -e（稀）	-owie	-owie / -e	3	1	0	0
baletmistrz 「バレエ団長」	-e	-e	-e	3	0	0	0
burmistrz 「市長」	-e / -owie	-owie	-owie / -e	82	2	0	0
fechmistrz 「フェンシングのコーチ」	-e	-e	-e	0	0	0	0
harcmistrz 「ボーイスカウトのコーチ」	-e / -owie	-e / -owie（稀）	-e / -owie（稀）	4	0	0	0
kapelmistrz 「指揮者」	-e / -owie	-e / -owie	-e / -owie	2	0	0	0
kuchmistrz 「料理長」	-e	-e / -owie	-e （-owie は誤り）	0	0	0	0
kwatermistrz 「兵站将校」	-owie / -e	-owie / -e	-e / -owie	2	0	0	0
mistrz 「達人」	-owie	-owie	-owie / -e（慣用句のみ）	944	60 (98%)	1 (2%)	0
ochmistrz 「船舶管理将校」	-e / -owie	-e / -owie	-e / -owie	9	0	0	0
rachmistrz 「計算の名人」	-owie / -e	-e / -owie	-e / -owie	5	1	0	0
rotmistrz 「騎兵の階級、その所有者」	-e / -owie	-e / -owie	-e / -owie	6	0	0	0
wachmistrz 「軍曹」	-e / -owie	-e / -owie	-e / -owie	4	0	0	0

wicemistrz 「次長」	-owie	-owie	-owie	45	4	0	0
zegarmistrz 「時計の修理工」	-e / -owie	-e / -owie	-e / -owie	12	0	2	0

【MISTRZ】に属する語はコーパス上で複数主格形が見当たらない語が多く、コーパスのみを用いて語尾選択の傾向を指摘するのは難しいように思える。ここではとりあえず、「-e をオーソドックスな語尾として考え、-owie は語彙的に限られた名詞にのみ結合する」というブットレルらの結論を確認するだけに留める。

9. 結論

再三述べているように、現代ポーランド語における男性人間名詞複数主格形の語尾選択は、簡単な規則では処理できない問題である。しかし、少なくとも拙論で分析した男性人間名詞―複数主格形の語尾選択が最も頻繁に見られる男性人間名詞―に関して、以下のような傾向が見られる。

9.1.【G】【R】から指摘できる傾向

【G】【R】に属する男性人間名詞で、もっぱら -owie を取る語、あるいは -owie を好む語を挙げていくと、以下のいずれかの条件に少なくとも一つは当てはまる。

a）一音節語

b）借用語

a に関しては、上記「8.1.【G】について」「8.3.【R】について」で例示している語を見れば分かる。b に関しては「8.3.【R】について」でもいくらか述べたが、ここでもう一度説明する。【G】【R】に属する借用語は、ポーランド語の語彙の中でも容易に借用語と見なされ得るような語彙である（例：*jog*「ヨガの修行者」、*car*「皇帝」、*emir*「アラブ国家の首長」など）。次節で述べる【LOG】【ER】【OR】に属する男性人間名詞も借用語ではあるが、これらに属する語はそれぞれ -log, -er, -or という生産性の高い接尾辞による裏付けがあるので、これらの語に対しては借用性の意識が比較的低いと考えられる。よって、「一音節語、あるいは借用性が強く意識される語は もっぱら -owie を取るか、-owie を好む」という傾向が見出されるだろう。この原因として、「8.1.【G】について」で述べたように、 -owie が語幹末の音交替を伴わないという点を挙げられるように思う。つまり、一音節語や借用性が強く意識される語が複数主格形で -i を取ると、語幹末の音交替によってパラダイムの他の形態との相関が連想し難くなるのである。よって、これらの語においては複数主格形で語幹を保存するために -owie を取る傾向があると推測される。

この節をまとめると、以下のように言える。「一音節の男性人間名詞、あるいは借用性が強く意識される男性人間名詞は、複数主格形で -owie を好むか、もっぱら -owie を取る」

9.2.【LOG】【ER】【OR】から指摘できる傾向

第 8 章の各節で詳しく述べているが、【LOG】【ER】【OR】に属する男性人間名詞（生産性の高い接尾辞 -log, -er, -or を伴う男性人間名詞）は、一般的に複数主格形で -i を好む傾向が見られる。

しかしながら、【LOG】【ER】【OR】に属する男性人間名詞で、複数主格形の二つの語尾がかなり競合している語彙が見受けられる。一般的に言えば、これらの語彙は頻度が高い。語尾 -owie と語尾 -i は共に男性人間名詞の複数主格形を表示する語尾であるので、この二つの間に機能的な差異はない。しかしこれらの語彙の頻度の高さを考慮に入れると、表現の余剰性を確保するために -owie / -i の競合が見られるのではないかと考えられる。

この節をまとめると、以下のように言える。「借用語の中でも、生産性の高い造語法で形成された（借用性の意識が比較的低い）男性人間名詞は、複数主格形で -i を好む傾向がある。ただし、頻度が高い幾つかの語に関しては、表現の余剰性を確保するために -owie / -i の競合がみられる」

9.3.【MISTRZ】から指摘できる傾向

【MISTRZ】に属する語の複数主格形がコーパスにそれ程収録されていないこともあって、残念ながらこのグループに関して筆者自身が指摘できることは特にない。一つ言えるのは、*mistrz*「達人」は借用語であり一音節語であるので、この語が複数主格形でもっぱら -owie を取ることについては「9.1.【G】【R】から指摘できる傾向」で述べた説明が当てはまるということだ。

ブットレルらの結論を確認する意味でこの節をまとめると、以下のように言える。「語尾 -e をオーソドックスな語尾として考え、語尾 -owie は語彙的に限られた名詞と結合する」

近年の辞書とコーパスを以て、上の三つのような傾向を指摘した。【MISTRZ】に関しては先行研究の成果を確認するに留まったが、【G】【LOG】【R】【ER】【OR】に属する男性人間名詞の複数主格形の語尾選択に関しては、先行研究を踏まえつつ独自の方向性を示すことができたように思う。いずれにしても、拙論で筆者が指摘したことはあくまで現代ポーランド語における傾向である。ある程度の期間を置いてこのテーマを再検討すれば、新たな興味深い傾向を確認できる可能性は十分あるだろう。

10.〔補章〕準男性人間名詞について

「4.3. 意味論的要因」で触れた準男性人間名詞について、ここでやや詳しく解説する。

意味的には男性人間名詞でありながら、形態論的・統語論的には典型的な男性人間名詞のように振舞わない語彙のグループが確認できる。石井は「ポーランド語の『準男性人間名詞』について」(1998年)でこのような語彙を「準男性人間名詞」と名付け、これを従来の名詞分類から独立した一つのグループとしている。ここでは、拙論で挙げられている *ceper*「シーズンの時だけ山に来る人」を指示代名詞 *ten*「この」の付いた形で説明する。単数主格 *ten ceper* の単数生格・対格は *tego cepra*、複数生格・対格は *tych ceprów* であるので、「単数・複数における生格と対格の一致」という点では男性人間名詞であるように見える。しかし、複数主格形では *te cepry* という形態が現れ得る[13]。つまり、語幹末の音交替 r / rz を伴わない複数主格形が現れ得る。

準男性人間名詞は、対象への軽蔑、親しみのニュアンスをより強く表現できるという叙想的・文体的効果を担っている。とはいえ、軽蔑のニュアンスを担って現れることの方が圧倒的に多く、従って準男性人間名詞に属する語彙は、もともと否定的な意味を持っていることが多い(例:*andrus*「ならず者」> *andrusy*)。

実を言うと、男性人間名詞の多くは準男性人間名詞的に振舞うことができる。例えば *student*「学生」は典型的な男性人間名詞なので、複数主格形は *studenci* という形態が期待される訳だが、敢えて語幹末の音交替を伴わない準男性人間名詞的形態 *studenty* が現れることがある。この形態によって、先に述べたような叙想的・文体的効果が生まれるのである。しかしこの *studenty* のような例は個人の随意的使用、つまりパロール的現象であって、辞書記述を要する「準男性人間名詞」と同じレベルで議論することはできないであろう。

ちなみに、「4.3. 意味論的要因」で挙げた二つの語 *dziadek*「祖父」と *wnuk*「孫」の複数主格形を最新の規範辞典 *Wielki słownik poprawnej polszczyzny PWN* (red. A. Markowski), Wydawnictwo Naukowe PWN, Warszawa, 2010 (『ポーランド語規範大辞典』以下 WSPP と略)で見てみよう。

dziadek の複数主格形は、「父親の父親、あるいは母親の父親」という意味では男性人間名詞的形態、つまり *dziadkowie* のみが規範的、「(男の)老人」という意味では準男性人間名詞的形態、つまり *dziadki* も認められる。「物乞い」という意味では *dziadki* のみが規範的である[14]。*wnuk* の複数主格形は、男の孫のみであれば *wnukowie* が規範的、男と女の孫の複数であれば *wnuki* という形が規範的であるとされる[15]。

---

[13] しかも ISJP と NSPP ではこの *ceper* の複数主格形として *te cepry* しか認めていない。

[14] *dziadkowie* は「祖父母」という意味にもなり得るが、WSPP ではそれに関する情報は得られない。ちなみに、USJP では *dziadkowie* を *dziadek* とは別の見出し語として扱っている。

[15] 男と女の孫の複数でも *wnukowie* という使用が認められるか否かは、WSPP の記述からでは判断できない。

【参考文献・資料】

Buttler, Danuta; Kurkowska, Halina; Satkiewicz, Halina: *Kultura języka polskiego*, Państwowe Wydawnictwo Naukowe, Warszawa, 1976

Doroszewski, Witold: *O kulturę słowa*, Państwowy Instytut Wydawniczy, Warszawa, 1964

Dunaj, Bogusław: „Formy mianownika liczby mnogiej rzeczowników rodzaju męskiego we współczesnej polszczyźnie literackiej" in *Język Polski* nr LXXII, 1992

Encyklopedia języka polskiego (red. S. Urbańczyk), Zakład Narodowy im. Ossolińskich, Wrocław, 1991

Indeks a tergo do Słownika języka polskiego pod redakcją Witolda Doroszewskiego (red. R. Grzegorczykowa, red. J. Puzynina), Państwowe Wydawnictwo Naukowe, Warszawa, 1973

Inny słownik języka polskiego PWN (red. M. Bańko), Wydawnictwo Naukowe PWN, Warszawa, 2000（ISJP と略）

Korpus Języka Polskiego Wydawnictwa Naukowego PWN < http://korpus.pwn.pl/ >, accessed: 2010/06/30

Miodek, Jan: *Odpowiednie dać rzeczy słowo*, Państwowy Instytut Wydawniczy, Warszawa, 1993

Nowy słownik poprawnej polszczyzny PWN (red. A. Markowski), Wydawnictwo Naukowe PWN, Warszawa, 1999（NSPP と略）

Przybylska, Renata: *Wstęp do nauki o języku polskim*, Wydawnictwo Literackie, Kraków, 2003

Rothstein, Robert: „Polish" in *The Slavonic Languages* (Ed. by Bernard Comrie and Greville G. Corbett), Routledge, London and New York, 1993

Uniwersalny słownik języka polskiego PWN (red. S. Dubisz), Wydawnictwo Naukowe PWN, Warszawa, 2006（USJP と略）

Wielki słownik poprawnej polszczyzny PWN (red. A. Markowski), Wydawnictwo Naukowe PWN, Warszawa, 2010（WSPP と略）

石井哲士朗「ポーランド語の『準男性人間名詞』について」『東京外国語大学論集 57』東京外国語大学　東京　1998 年

石井哲士朗「ポーランド語名詞における格形態の文体的変異体について」『言語研究 III』東京外国語大学語学研究所　東京　1993 年

『言語学大辞典 第六巻（述語編）』（編著：亀井孝 他）三省堂　東京　1995 年

O końcówkach mianownika w liczbie mnogiej rzeczowników męskoosobowych we współczesnej polszczyźnie.

Kazuhiro SADAKANE

We współczesnej polszczyźnie istnieją cztery końcówki mianownika w liczbie mnogiej rzeczowników męskoosobowych, czyli *-i* (np. *Litwin* > *Litwini*), *-y* (np. *fryzjer* > *fryzjerzy*), *-e* (np. *baletmistrz* > *baletmistrze*) i *-owie* (np. *Belg* > *Belgowie*). W języku polskim samogłoski [i] i [y] są wariantami tego samego morfemu, dlatego w niniejszej pracy te dwa elementy są traktowane jako jedna końcówka.

Problem polega na tym, że niemało rzeczowników męskoosobowych ma dwie dopuszczalne formy, np. *chirurg* > *chirurgowie* / *chirurdzy*, *biolog* > *biologowie* / *biolodzy*,*oficer* > *oficerowie* / *oficerzy*, itp. Reguły panujące nad tym wyborem są skomplikowane i są źródłem wątpliwości nawet dla rodowitych użytkowników języka polskiego.

Z poprawnościowego punktu widzenia na ten temat napisali Witold Doroszewki w „*O kulturę słowa*", Danuta Buttler, Halina Kurkowska i Halina Satkiewicz w „*Kulturze języka polskiego*" i Jan Miodek w „*Odpowiednie dać rzeczy słowo*". Natomiast z opisowego punktu widzenia napisali Bogusław Dunaj w „*Języku Polskim* (nr LXXII)" i Tetsushiro Ishii w „*Area and culture studies* (nr 57)".

Według B. Dunaja wiele rzeczowników męskoosobowych zakończonych na *-g*, *-log*, *-r*, *-er*, *-or* i *-mistrz* ma dwie fakultatywne formy. Autor niniejszej pracy analizuje słowa należące do jednej z tych sześciu grup, używając „*Nowego słownika poprawnej polszczyzny PWN*", „*Innego słownika języka polskiego PWN*", „*Uniwersalnego słownika języka polskiego PWN*" i „*Korpusu Języka Polskiego Wydawnictwa Naukowego PWN*".

Konkluzja autora jest taka: w grupach *-g* i *-r* słowa zapożyczone czy jednosylabowe w większości przypadkach wybierają końcówkę *-owie* w mianowniku liczby mnogiej. Końcówka *-owie* nie powoduje alternacji spógłosek w końcu tematu, dlatego według autora ta końcówka funkcjonuje jako „czynnik utrzymywania konstrukcji tematu". Natomiast w grupach *-log*, *-er*, *-or* wiele słów wybiera końcówkę *-i* w większości przypadkach. Trzeba zwracać uwagę na kilka słów, które równolegle wybiera obie końcówki *-owie* / *-i*. Zdaniem autora, powodami tej równoległości są frekwencyjność i redundancja